

平成28年度 博士学位請求論文要旨

近世刊本『録内御書』の書誌学的研究

堀部正円

本研究は、近世に出版された 41 巻本（目録含）の刊本『録内御書』について、これまでの御書編纂史で論じられた内容を再検討し、諸版の特徴と本文の異同について述べたものである。

『録内御書』は、日蓮聖人の滅後およそ百数十年後に編纂されたと伝えられ、中世・近世を通じて最も重視されてきた日蓮遺文 140 余編である。近世初頭に隆盛を極めた古活字版として 3 種類の出版が確認されることや、以後の整版も継続的に出版され流布したことから日蓮教団における『録内御書』の重要性が首肯される。したがって、従来の御書編纂史を再検討し、諸版を分別整理してその特徴を明らかにすること、また諸版の本文異同を明示することは、日蓮教学研究の上からは極めて重要な課題といえる。また、近世出版史という視点においても、日蓮宗関係の書籍は多少なりとも言及されるが、『録内御書』はこれまで殆ど注目されず、とりわけ古活字版については認知度が低い。書誌学研究の上からも、刊本『録内御書』を研究する意義は大きいと言えよう。

本研究では、形態書誌学（図書の外形を調べること）と校勘学（本文を比べ勘えること）の 2 つの視点より刊本『録内御書』を検討した。

序論では、刊本『録内御書』を書誌学的に研究するために、御書と刊本『録内御書』の研究史を概観し、書誌学研究の現状を概観した。その上で、問題の所在を明らかにするとともに、本論の研究方法を明示した。

本論の第一部では「『録内御書』について」と題し、刊本『録内御書』を研究する前提として、『録内御書』の成立、写本、および刊本『録内御書』の概要を検討、解説した。

第一章「『録内御書』の成立」では、これまでの『録内御書』成立の時期や場所などに言及した先行研究を概観し、その上に成り立つ近時の日什門流成立説を紹介して、それが確定的ではないが、注目すべき内容もあり、さらなる検討が必要であることを述べた。

第二章「『録内御書』の写本」では、中世から近世初頭における『録内御書』の写本の概観や、写本をした意義や目的を検討した。また、これまで言及されなかった現存写本の紹介を行った。この中で、全冊の端本と思われる写本を取り上げたが、一冊のみ現存する場合、全冊の端本なのか否かを検討する必要性があることや、その困難さを述べた。

第三章「刊本『録内御書』各本の概説と収録御書」では、近世に出版された古活字版及び整版の『録内御書』の個別概観と、刊本『録内御書』諸版で収録される御書を確認した。

第二部では「形態書誌学から見た刊本『録内御書』」と題し、形態書誌学の立場より本そのものに焦点を当て、各版の特徴を解明した。

第一章「古活字版『録内御書』の研究」では、古活字版A本、A'本、B本の3種について、活字や版式の相違などを、書誌を提示しながら各本の特徴を明らかにした。また、日蓮宗関係書籍の古活字版についても概観した。出版場所については、B本はこれまで本国寺出版説があったが、法忍寺妙義文庫に所蔵する古活字版から発見された刷り破れなどをもとに改めてその可能性が高いことを述べた。一方、A種本については、本国寺版、寺院版などという説もあるが、書肆による古活字版の出版もあり、確定できないことを述べた。

第二章「整版『録内御書』の研究」では、寛永十九年版系と寛永二十年版系の出版事情や特徴などを明らかにした。寛永十九年版系では、従来寛永十九年版が、寛永十九年以前に出版されていたと考えられていたが、同説の根拠が成立せず、とりわけ立正大学図書館に所蔵する寛永十九年版を刊記欠本と推定することで、寛永十九年の出版であろうと述べた。また、寛永十九年版の覆刻版の存在が確認されたため、同版を「覆寛永十九年版」と称し、確認できた21巻25冊のうち、都合13巻15冊を取り上げ、その特徴として寛永十九年版の版式を使用していること、寛永十九年版の板木と相違すること、白文体の御書は一部を除き、送り仮名、返り点が付されていること、潰れた文字が散見されることという4点を指摘した。寛永二十年版系では、寛永二十年版の特徴としての註記や送り仮名・返り点のこと、書肆・庄右衛門のことをはじめ、寛文九年版との相違について述べた。また、修補版を謳う宝暦六年版では、「月支」と表記することや、巻二十三の目録のことなど、いくつかの特徴的な部分を取り上げて説明した。さらに、寛永二十年より近代初頭まで刷られた同系は、版面の対照によって一部に改刻された形跡が窺えたことを指摘し、恐らく宝暦六年版の出版時に改刻されたのではないかという推測を提示した。

第三章「取り合わせ本から見た刊本『録内御書』」では、東洋文庫及び法忍寺妙義文庫の二例に基づき、各本の書誌を参考にしながら、刊本『録内御書』に接する上で注意すべき問題点を述べた。すなわち、全冊揃いの本であっても、諸版が入り交じっている東洋文庫所蔵本、また諸版が入り交じっているのみならず、一冊の本の中にも諸版が混在した妙義文庫所蔵本について、それぞれ版の特定を行いながら、取り合わせ本を見抜く必要性、とりわけ原装と改装の相違を見抜く重要性を述べた。

第四章「書き入れから見た刊本『録内御書』」では、刊本『録内御書』によく書き入れが見られることを諸本を示して紹介した。中には、身延山に所蔵していたという『観心本尊抄』の正本の指摘が何を指すのか判明しないことや、中山において真蹟と対校し、その相違を書き入れる行為があったと想定される数例を紹介した。

第三部では「校勘学から見た刊本『録内御書』」と題し、校勘学の視座より刊本『録内御書』に収録された御書の諸版について、諸版間のみならず、可能な範囲で真蹟や写本、近代の御書集などとも校合して、その同異を明らかにした。

第一章「本文異同にみる刊本『録内御書』諸版の特徴」では、古活字版における本文異同を確認し、A'本、B本に表記の近似性が見られることを述べた。さらに、写本と校合すると、B本が本満寺本に近似することが確認できた。一方、A本は独特な表記を持つが、写本では本法寺本に比較的近似することも判明した。ただし、B本と本満寺本ほどの近似性はないため、さらに多くの写本と校合する必要があることを述べた。次に、整版では寛永十九年版と寛永二十年版は、ともに古活字版 A'本を版下作成の底本としたが、それぞれが恐らく写本と思われる独自の対校本を底本として校合し、古活字版 A'本から変更させている実態を述べた。寛永二十年版には、24編の真蹟及び真蹟対校本と校合したと表記されていたが、巻二十二の『聖人御難事』のようにかなり真蹟に近似する表記に修正された事例もある反面、巻八の『観心本尊抄』では底本の古活字版 A'本から大きな変更を加えた結果、真蹟から乖離してしまった事例も確認された。さらに、版面や丁数などの形態的視点より寛永両版の相違が見抜ける場合があることや、寛永二十年版と宝暦六年版の各巻における相違の実態も明らかにした。また、新発見となった覆寛永十九年版は、寛永二十年版の表記を酷似させて修補している実態を、数編の御書を用いて確認した。

第二章「『録内御書』の注釈書の特徴と異本表記」では、円智日性撰『御書註』と久成日相撰『御書和語式』の二つの注釈書を取り上げ、その特徴を明らかにした。『御書註』は、日性の用語解説があくまでも経論を重視し、日蓮教学的解釈が一切見られないことを、日性編『倭漢合運』や『柿葉』の概観や『立正安国論』部分を記した承慧日修の注釈と比較して明らかにした。また、日性の表記と古活字版の表記を対照したが、近似性が見られないことも確認した。『御書和語式』は、真蹟表記を重視する日相の対応や、多くの異本註記を述べた様子を『立正安国論』の対照などを通じて、詳細な分析を行った。日相は、慶長百部刷り本に信頼を寄せている有り様も、本書から確認できることも述べた。

最後に、課題として、御書という視点では全巻の本文異同や『録外御書』の書誌学的検討などがあること、また、書誌学研究という視点では、日蓮宗関係書籍の書誌学的研究や、未だ手つかずとなっているものが多い仏教書の書誌学的研究が必要であることを述べた。この仏教書の書誌学研究は、仏教学という視座に止まらず、諸学問との学際的な研究が必要であることを述べた。